

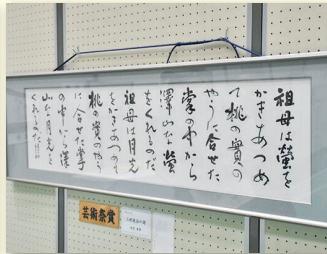
11/3

## 第72回大和郡山市芸術祭



絵画、書道、工芸、写真の4部門に応募された作品に加えて、審査員、招待作家の作品を合わせた総数は232点。色鮮やかに描かれた作品、力強く書かれた作品など、目を奪われるような数々の作品が三の丸会館の体育館内に並びました。来場した人たちも作品数の多さ、作品の完成度に驚きながら、芸術の秋を堪能している様子でした。

入賞者の一覧等は市HPをご覧ください。



市長てくてく城下町239

## おん祭と秀長さん

大和郡山市長 安田 清

今年も残り少なくなりましたが、師走を迎えた奈良の風物詩といえば春日若宮おん祭で、12月15日の大宿所祭には郡山の方々とともに参列させていたることが恒例となりました。

当日、おん祭の参勤者や大和武士のために行われる御湯立の巫女は郡山の方が代々勤めるなど、佐保川の東側には、かつて春日社や興福寺の領地であったところが多かったこともあり、おん祭と郡山のゆかりは非常に深いものがあると言えるのではないかでしょうか。

通説では、今からおよそ900年前、関白の藤原忠通が五穀豊穣・国民安寧を願っておん祭を始めたとされてきましたが、最近の研究によれば、興福寺が大和国を自分たちのものとして確保しておくため春日社の威光を借りて始めたのではないかとも言われています（『祭禮で読み解く歴史と社会』幡鎌一弘・安田次郎著より）。

しかし莫大な費用がかかることもあり戦国時代には、年により実施が難しくなっていました。

そうしたなか、440年前の天正13（1585）年に郡山城主となった秀長はおん祭の復活を命じる一方で多額の費用を負担。豪華な大名行列に当時の人々は度肝を抜かれたと伝えられています。

秀長が大和国の大政を任せられた背景のひとつに、強大な経済力や軍事力を有する寺社勢力を抑えるという任務がありました。

実際、秀長は検地や刀狩りを強行し、所領の没収なども行っていますが、一方で社殿を寄進したり、おん祭に資金を投じる側面もあったのです。

秀長の時代につくられた形が今のおん祭に伝えられていると知ると、何だか誇らしく思えるではありませんか。

先月、小中学生用副読本『大和大納言秀長さん～もう一人の天下人～』が完成、小学校5年生～中学生への配付が始まりました。

シビックプライドの向上につながってほしいと、心から願っているところです。